

ポロポロ出ました。家内は私が復員した安心感からか一月近く寝込んでしまいました。長女は小学生でしたが、私の出征する三カ月前に生まれた長男が、私が帰国してから二カ月後急病で亡くなったのは、かえすがえすも残念です。今ならよい薬もあり助かったことと思います。

崑崙関の戦い

島根県 清水良一

昭和十一年徴集の第二補充でした。召集は昭和十三年九月、浜田歩兵二十一連隊補充隊へ入隊しました。両親健在で、一町五反ほどの農家の長男で、結婚はしていませんでした。当時は事変直後のことで歎呼の声に送られて村の駅から雄々しく出発しました。

原隊で初年教育を受けた後、北支青島へ上陸、歩兵二十一連隊第十中隊に編入されました。海州作戦参加が初めての戦闘参加でしたが、この作戦討伐は大きな

戦闘に遭遇することはありませんでした。

次いでノモンハン救援のため、我々第五師団は急遽鉄道輸送で北上を開始し、四平街に到着した時点で停戦となり、あの熾烈なノモンハン前線に出ずに終わり、旅順に集結しました。

旅順では軍旗祭が開催され、行事の銃剣術の対抗試合に選ばれて出場しました。旅順から師団は再び乗船、どこともなく出航しました。ふと気付いて見れば見覚えのある宇品港で官島の鳥居も遥かに望見できました。

「凱旋だ」「帰還だ」との歓喜も束の間、夕刻には船団は補給を完了し、行方知れない大海原へ就航が始まりました。船団は十一月、一路廣西省南寧を目指して猛進を開始しました。

南寧突入のための渡河戦の激突は第一大隊によって行われ、武勲は連隊史に長く留まることとなりました。

我々の中隊は、南寧市郊外に駐留、警備に任じていましたが、十二月初め敵の大部隊の南下の情報のもと、当時マラリヤ患者の比較的少ない我々の小隊が中隊から選ばれて出発することとなりました。部隊が警備地

区を出発すると間もなく敵に遭遇し始め、夜行軍、夜間の敵との遭遇の繰り返しが一週間以上も続きました。九塘崑崙関に孤立した友軍救出が至上命令であります。食糧も尽き果て、食もない敵中突破の強行軍です。九塘へ向かう途中の地形は高い突出した山々の連なる山脈です。敵は後退時に山を焼いて後退するので、山肌が黒く焼け、カーキ色の軍服の我々は敵の視界に入り易く、好目標となり、敵は黒服であり発見が難しかったのです。

敵の総司令官は白崇禧、敵兵は廣西省抗日学生軍で戦意は旺盛でした。我々が前線部隊にやっと到着した時は、野砲の兵が、野砲を既に埋没して後退し、無念と救援の嬉しさと交々で、涙を流して喜んでくれます。糧秣の補給は全然ない、腹が減ってどうしようもない。死んだ馬の骨の肉を削いで口に入れる始末です。このころ、中村旅団長が戦死され、三木連隊長が代わって前線の指揮を取られました。

戦死者の遺骨の手首を切断したものを五人分も携えて行動していました。敵弾下で焼いて骨にする暇も場

所ありません。前方の全滅した中隊田村山を望見すると、死体が裸にされ、山積みされ、小銃や機関銃等兵器が一面に散乱し、目を覆う惨状を呈していました。敵の一五榴、野砲弾が物凄い音を響かせて炸裂する。三百人くらいの敵が手榴弾を投げて突撃してくる。手榴弾は山頂の下の死角から投げかけてくるので、死角で我々の小銃では撃てない。乾麵包が三、四人に一袋あて支給されわずかに飢えをしのぐ有様でした。

敵は自動車で弾薬、糧秣を無尽に補給するのに対し、友軍は補給の方便は一切ない。わずか友軍機から投下された補給物資も敵地に落下し、我々は無念、手に届かない始末です。田の落ち穂を拾って壕の中で一粒一粒爪で剥いで口に入れます。

富田山の友軍陣地の救援に向かう。小隊長も戦死、小隊残存者十三人くらいでした。敵弾雨飛の中、生存負傷者を背負って駆け抜けること三度往復、全く生死を超越した、無我夢中の心境でした。戦死者の遺骨のために、手首を円匙で叩き切り取ったことなど、平常心ではとても考えられない行動でした。

負傷したのはこのときで、左腕上膊部を手榴弾破片でやられ、銃を持つことができず、山から退くことになりました。途中山裾の谷間にいた小隊長に、「なぜ後退したか」と厳しく叱られました。これが、自分以前線に出ず、谷間に居座りながら、負傷後退した兵に對しての言葉とは。その直後に大隊長に会いましたが、大隊長からは「ご苦労だった」といたわりの言葉をいただいた。

負傷後トラックに山積みされて南寧に、さらに欽県へと後送されました。重傷者が自然と軽傷者の下敷きとなり、いつの間にか息が絶えている者もあります。この輸送中も敵襲や、地雷でトラックの全員が戦死する車も多かったのです。

傷は重く、欽県から廣東―高雄―台中―広島―東京―別府と病院を転々とし、治癒後、昭和十五年十月、召集解除、除隊しました。

二回目召集は演習召集であつて、昭和十八年七月、期間は約二カ月で、教育は主としてガス訓練でした。

三回目の召集は昭和二十年四月、山口連隊へ入隊、広島へ転属し、原子爆弾直下の広島十一連隊における被爆体験をしました。

追憶―原爆投下の直下の本人の記述―

昭和二十年四月、私は第三回目の応召で山口連隊に入隊し、五月十五日に広島教育隊に分遣となり、日夜勤務に加わっていました。

八月に入り会報に特殊爆弾が投下されるとの報で、広島市民は、毎日夕方になると知人や親戚を尋ねて山の方へ避難し、明朝八時前後に家へ帰るといふ毎日が続きました。

原爆投下以前は主としてグラマンが右往左往して機銃掃射を繰り返すのみで、B 29も編隊を組んで広島上空を通過、呉市方面に爆撃が行われ、広島は一度も爆弾の投下が無かつたため、いささか安心感も多分にあつたでしょうか。原爆投下の前の日の夜は、七回も警戒警報、空襲警報があり、その都度巻脚絆の軍装での集会、解除の繰り返しで、ほとんど眠る時間もありま

せんでした。六日当日の朝は起床延期で、さすがしい朝を迎えました。

八時を過ぎた頃、また空襲警報のサイレンが鳴り、間もなく解除ホットした矢先、何気なく上空を見上げると、B 29が三機編隊で朝日に照らされ東南の方向に飛んで行くのが見えましたが、何となく不気味な予感を受けました。それもそのはず、これが世界最初の核爆弾を搭載した悪魔であったことはだれも知る由もありません。

突如閃光と共に大音響、一瞬にしてあの頑丈な兵舎が倒壊し、下敷きとなった呻き声があちこちから起きました。私もやられた、もう駄目かと思いました。手も足も動かない。材木や屋根裏の土や瓦が崩れ落ちて目も口も一瞬も開けていることができない。頭部に倒れ裂けた木材の切れ端が突き刺さったのを取り除いて、手拭で鉢巻をして出血を防ぎながら周囲を見回すと、材木の中に埋もれ手も足も自由を失って動きも取れない状態であった。渾身の力を振り絞って何とか脱出できた。

見渡す限りペシヤンコ、南の山から北の山までほとんど建物がありません。朝であるはずなのにあたりが薄暗く、その中で建物の下敷きとなって懸命に助けを求める呼び声。朝食時の直後で火の始末をしていない時刻なので、あちこちから火災が起こり、広島全市が火の海だ。

市内はあちこちに弾薬庫があり、これに火が入り、爆発する物凄い大音響を発する。当初は未だ爆撃が続いているのかと疑った。毎朝洗面のとき、眺められた眼前の広島城が今は姿を書き消すごとく跡形もない。我々の教育隊は城の濠の畔でした、濠の中の魚や蛇が白い腹を上に向けて浮いている。濠の蓮の葉が焼け尽くしわずかに茎が残っているだけ、お濠の老い松も立木のまま枝が燃えている。

爆弾投下から一時間くらい経過したとき、大粒の雨が降り、それと共に龍巻が起こり、トタン、板などを空高く巻きあげて、やがて落ちてくる。建物の火災の焰が数十メートルの尾を引いて狂奔する。避難も思うようにできない。

爆弾投下後、またしてもB 29が低空で飛来した。また爆撃かと肝を冷したが、今度は被害確認の偵察飛行であつたらしい。

城の濠の側の広場には負傷した兵隊、市民の多数が転がって呻き声を上げ、助けを求める者、家族の名を呼び合う声、助けてくれ！殺せ……。顔、手足、血まみれ焼け爛れた様相は、話に聞く「地獄絵図」そのものである。

私たち負傷者は治療してもらえないまま、教育隊の広場でアンペラを上から被せた状態に三日二晩放置後、中国軍管区の衛生隊の救援隊から応急手当を受けた。

死者は長い壕の中に積み込まれ火葬に付されました。その臭気が漂い、市内の惨状は想像を絶するものでありました。

原爆は広島、長崎を一瞬にして屍の街に変えた。無差別大量殺傷し人の世の出来事とは到底いえない無惨な光景であり、人類が初めて経験した核戦争の地獄でした。

核廃絶。それがこうして核の下から生き残った私の

切ない願いです。

広島の被爆地に三日二晩放置された我々は收容され、トラックに積み込まれ、麻生郡大林小学校の臨時救急病院に搬入されました。

治療の方法もなく、救援物資もないまま、竹筒に飯と水が支給されるのみで放置され、所持金もないので、負傷者相互で融通し合つて、付近農家から豆などを買つて日々を送りました。

收容者の中から、頭髮が抜け、内出血が起こり、便所等で斃死（貧血）する者が次々と出ました。

その後、山口の衛式病院に移されましたが、ここでも死者が多く、下痢症状が出るとその翌日は死亡する例が多かつたのです。山口の病院では多くの火葬者を農家の人々の手伝いを受けて処理していました。十月十五日ころ家に帰りました。

結婚は昭和十六年三月、第一回の召集解除後。

長男出生は昭和十八年六月。